IS <インフィニット・ストラトス> 月の剣士

kahiko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS <インフィニット・ストラトス> 月の剣士

【Nコード】

N1840R

【作者名】

k a h i k o

【あらすじ】

日本が極秘に作っていたIS開発施設に間違えて入ってしまったバカな高校生2人。そのときある組織がこの施設が襲撃される。それに巻き込まれてしまう。はたしてバカ2人はどうなるのか？
「バカって言うな！」

第1話 ISとの出会い（前書き）

ISは恋愛とロボットバトル主体ですが、
この作品はコメディとロボットバトルを主体としてみました。
見てください

第1話 ISとの出会い

「みんな走れ！」

「言われなくてもそんなこと分かってる！」

2人は施設を走っている。

「貴様ら、往生際が悪いぞ」

「杉、なんで僕らISの施設見学に来ただけなのにどうしてISに襲われてるの!？」

「そんなこと俺に聞くな!とりあえず走れ!和!」

僕らはとりあえず走った。

しかしISのスピードは早くすぐに追いつかれてしまう。年貢の納め時ってやつだ。

「お前たちに恨みはないが口封じのために消さしてもらおう」
「いやいや、それ理不尽すぎるよ!

壁際に追い込まれた。

これまでか!杉、短い間だったけどありがとう。

そのとき、

「和!壁に少し穴が開いてるいぞ!人一人なら入れる大きさだ」

よくやった、杉!それじゃあ、

「それじゃあ、後はよろしくね」

ふたりは言葉が重なった。

.....

「何を言ってるのかな、杉。こういうときこそきみの出番でしょう?」

「いやいや、こういうのはバカであるお前の仕事だろ?」

「なんだと!てめえ表に出やがれ!」

「やんのか!？」

僕らが睨みあっていると、僕らの目の前にビームが通りすぎた。

「貴様ら、こんな時だというよく呑気なことをしてられるな」

そうだった、僕ら、ピンチってこと忘れてた。

「杉、ここは協力しよう。」

「そうだな」

僕らは急いで穴に入った。

「くそ！ 抜け場所があつたか！」

ここはどこだろう？ 見たところISのパーツが沢山あるけど。

僕たちはあたりを見回していると、そこに驚くべき物がそこにあつた。

ISだ！

なんでこんなところにISがあるんだ。しかも2機もあるだなんて、こんなのを作ってたなんて。ところで、

「祐次はどこへ行つたんだろう？」

「確かに、電話してみるか？」

杉は携帯電話を取り出し、祐次博士に電話した。

つと祐次って言うのは僕たちの友達で、IS開発の仕事をしてて、今日ISの施設見学に来たのは祐次の計画なんだ。

ブルルルルル、ガチャ、

「おー、杉。心配したぞ」

よかった、祐次は無事だったんだね。

「おい祐次無事だったんだな。今何処に入るんだ？」

「何処つて、研究所だけど・・・」

「お前もまだいるのか？ 危険じゃないのか？」

「杉、何言つての。2人が研究所にいつまでも来ないからなにかあつたんだとおもつて」

「・・・は？」

「何を言ってるんだ？」

「それより隣の研究所が襲撃されてるらしいよ。気をつけてね。」

「和、これはどういうことかな？」

「あはは、行くところ間違えたみたい」

「あははははは」

「あははははははは」

ふたりとも笑っている。でも目が笑ってない。

「てめえ！歯くいしばりやがれ！」

「ごめん！こんなことになるなんて思ってたんだ！」

「やっぱりてめえは大馬鹿やろうだ！」

「とりあえずどうにかしてここから出よう」

「この原因を作ったやつが言うか、それ。だがしかたがない、互いに協力しようじゃねえか」

「了解」

後で東京に沈めてやる！

そう決意したとき、

ドカーーン！

壁が壊れた。

さっきのISが乗り込んできた、やばい

「時間がかかったが終わりだ」

「杉、今度こそ絶対絶命だよ！」

「和そつちのISにいけ！もしかしたら奇跡が起きてISが起動するかもしれねえ！」

「わ、わかった！」

僕はISに近づく。

「無駄だ、ISは女にしか動かせない。それぐらいお前たちでもわかるだろ」

「だが、日本には男でISに乗れるやつがいるっていうじゃねえか。だから奇跡信じてみるぜ」

「無駄なことを」

僕はISに触れた。

しかしなにも起きない。やはりだめか！

「だから言っただろう。無駄だと、そろそろ終わりにしてやる。まずはそのバカから消してやるっ」

「バカじゃない！僕の名前は弓弦和矢だ！」

「死にゆくもののやつの名前を覚える価値など無い、消えろ」

彼女はライフルの引き金を引いた。

こんなところで死ぬのか、まだ青春を謳歌している途中なのに。こんなところで死ぬなんて……

嫌だ！

そのとき、奇跡が起きた……

(I S 起動)

僕の目の前にさつき起動しなかった I S がいた。

「ばかな！ I S を起動させたというのか！？しかも I S に乗ってないのにどうして動く!？」

彼女は驚いている。でもそれは僕も同じだ。杉も驚いている。

なんせ男である僕が I S を動かしたからだ。

そのとき頭の中から声が聞えた。

(少年、我が力を欲するなら、我が名を呼べ)

(名前……名前……名前……)

月光！)

僕は光に包まれ、気がつきと僕は I S をまとっていた。

ん？

「なんじゃこれ!？」

僕が I S をまとってるよ！

「まさか本当に乗れるとはな、和」

「こんなかとなるなんて思わなかったよ」

「くそ！これは予定外だ、こうなればIS本体を破壊してコアだけでも持って帰るとしよう」

彼女はふたたびライフルを構え、僕にめがけて撃ってきた。

「うあ！」

僕をとつさにかわした。

「杉、どうすればいいの？」

「とりあえずそのISにある武器で戦うんだよ！」

そう言われ、僕はなんでもいいから武装を出した。

武装は剣一本のみ。

近接特化ブレード・閃刃・朧月。

これ1つだけって悲しくない？

「1次移行していないISなど私の敵ではない」

「杉、1次移行ってなに？」

「祐次に教えてもらっただろ、ISは最初は初期設定だが初期化と最適化が終わることによって

1次移行になるんだ。だから1次移行するまで粘るんだ！」

「分かった！」

でも僕ISの操縦したことないし、どうしよう。

「残念だったな。お前のISが1次移行するころにはお前らはこの世にいない」

「たいした自信だな。機体性能ではこっちのほうが上だぞ。それがわからないわけじゃないだろ」

「すぐにわかるさ」

すると彼女の後ろからもう1体のISがやってきた。

「何をしてる？早くその2機のコアを持ち帰るぞ。」

「それがあの男の子がISを起動させちゃったの、手伝って」

「了解だ」

そんなのありなの！？2対1だなんて、勝てるわけない。

「どうしよう、杉？」

「こうなったら作戦変更だ！」

「なにかいい作戦でもあるの?」

「和が1人と戦いながら……」
僕が1人と戦いながら、

「もう1人と戦う!」

「なるほどーってそれ僕が2人同時に戦うのと一緒じゃん!」

「こっとなつたら逃げるぞ!」

「最初からそうしようよ!」

僕は杉のほうに向かおうとしたがビームが僕の顔をかすめた。

「逃げられると思っっているのか?」

「くっ!」

「ふたりであの少年を叩くぞ。」

「わかったわ」

途中で入ってきた女がそういうと僕に接近してきた。

僕は閃刃・朧月で最初の1太刀は防いだが次の1太刀を2回くらってしまった。さらに後ろからB Tライフルを3発まともに

なんてうまい連携なんだ。

僕は膝を床に付けた。

「無駄だと言っただろう。彼女との連携の相性もいいし、それに1次移行もしてない素人同然のあなたが私たち2対1で勝てるわけがないでしょう」

「万事急須だよ、杉」

「……」

杉は黙っている。

「今度こそ終わりね、消えなさい」

B Tライフルを2発速射した。

(今度こそ終わりか……)

僕はそう思っただ目をつぶったその瞬間、

ガキンッ!

あれ?僕は目を開けるとビットが僕を守ってくれた。

「待たせたな、和」
そこにはISに乗った杉の姿があった。

第1話 ISとの出会い（後書き）

すいません。一話の部分が抜けていました。
更新は、明後日です。

IS学園へ(前書き)

見てください

IS学園へ

「杉もISに乗れたんだ」

「当たり前だ、お前に出来て俺に出来ない訳が無いだろ」
え・・

もしかし乗れたの？

「よし、これで2体2だ。勝負は此処からだ！」

これで少しはまともに戦えるだろう

「どうする？」

向こうは相談している

「こうなったら、2機とも破壊する。そろそろ軍が此処に来る頃だ。」

「

了解。」

2人組の女達が話している。

こんな事まで来て負けてたまるか。

それにもうじき軍が此処に来るから、それまで守り着けばいい

「逃げるぞ」

杉は僕の近くに来てそう告げる

「どうしてさ？此処に入たら軍も来るし安全だよ」

「考えてみる？俺らはまだ1次移行して無い状態でさらにISの扱いにも慣れて無い

これじゃあ俺ら2人とも天国だ。」

「杉は地獄の間違えでしょ」

「んな事今はどうでもいい。」

とにかく俺が逃げ道を作るからお前その準備をしておけ」

「分かった。」

そう言うと杉はB Tライフルを上に向けた。

「させるか！」

接近型のISが杉の方へ向ってくる。

後方からもライフルで撃ってきた。

「頼む」

杉はそう呟くと8枚のビットが動き出した。

接近するISには6枚のビットで射撃して近づけないようにし

残り2枚のビットは後方からの射撃の防御に使っていた。

「こいつ！前の奴よと違ってかなりのの遣り手だ。」

ちよと貴方その言葉かなり傷つくなあ。

そのとき

杉のB Tライフルは天井に向かって撃たれ、暗かった部屋に光が差し込んだ。

「今だ。いくぞ！」

「分かった。」

僕らは天井に向かって飛んで入た。

外に出ると杉は直ぐにある方向に向かって飛び出した。

僕も慌てて杉の後を付いて行く

「杉何処に行こうとしているの？」

「IS学園だ。あそこなら軍も入るし何より安全だ。」

「なるほど〜所で杉ってISの扱いに慣れて入るよね」

「まあな、それより大事にな話がある」

杉は真剣な眼差しで僕を見ながら言った。

どうしたんだろ？

「これから行くIS学園の第3アリーナには遮断バリアと結う外敵から攻撃を防ぐ為のバリアがある。

そのバリアの強度はかなり高い。だから俺も最大出力でそのバリアを壊そうと思うのだが、フルバーストするにはチャージに時間が5分かかる」

「何が言いたいの？」

「要するにチャージまで5分かかるからあいつ等を足止めしとけて事だ。」

「それって僕に遣られるって言ってるようなものだよ。」

「これしか方法が無いんだ、頼む」

うんこんな真剣に頼まれたら断れないなあ。

狩りを作るのも悪くは無いな

でも、あんなの2機相手にするなんて負けに行くような者だからなあ。

どうしよう？

しばらく無言が続いた。そして

「分かった。遣ってみるよ」

「すまない恩にきる」

「らしくないよ杉」

「そうだったな」

僕が話し終わった時、後ろから変な音がする。

後ろを振り返るとさっきのIS2機が迫って入た。

「杉、後ろの方から来てる！」

「アリーナが見えた。さっきの作戦で行くぞ。」

「了解。」

一回言つて見たかつたんだよね

杉はアリーナ真上に配置をとり、腕に付いている2つのB-Tライフルを取り出し
合体させた。

「誤差修正、チャージ開始」

頼んだぞ和！バカの底力を見せてやれ。

IS学園へ（後書き）

感想をお願いします。

お前は誰だ！！

そんな僕を

ガキンツ！

「死にぞ来ないにいまさら何が出来る」
死にぞ来ないですいませんね

「あんたらに勝つ事」

「戯言を」

敵のブレードを弾きながら後方からの攻撃を交わす。

「そんな戦い方で私たちには勝てないぞ！！」

「そんな事分かってる」

僕の目的は杉のチャージが終わるまでの時間稼ぎ。

それまで何としても絶えないと

「なるほど時間稼ぎか。大方もう1人の男がアリーナの遮断バリアを破ってIS学園に逃げ込む積りか？」

「.....」

「凶星か、それなら私にも考えがある。この使用は極力避けたがったが」

そう言う僕に向かって来た。僕は剣を構え防御体勢を取った。

彼女は右手を突き出して何かバリアーの様な物を展開した。

何だこれ？と僕が思った時

「!?!」

僕は慌ててしまった。何故なら

「体が動かない」

どうしたんだよ!?! 動けよ!!!

「無駄だ。私の停止結界の能力の前ではな」

「何だよそれ？」

「死に行く者に話す必要は無い・遣れ！！」

「了解。」

もう1人が大型ライフルを取り出し、撃つて来た。

そして僕は停止何ちゃらによって動きを止められている為防御も回避も出来ない。

つまりノーガードでぼこられるって事になる。

そして一発目が当たる。「グッ！」

そのとき僕の体に痛みが走った。

可笑しいなあ、絶対防御があるから痛みは無い筈なのにな・・・。

僕がそう思っている間にも2発目、3発目があたりシールドエネルギーが

120・・・70・・・10・・・そして最後の1撃があたり

シールドエネルギー残量0と表示された。

そして月光の体が光出して、銀色に成った。

エネルギー残量の下に「1次移行終了」とも表示されていた。

「今頃に成って1次移行終了が終わったか。だがもう遅い。」

確かにね。もうちょっと早く終わって欲しかったよ。

それにしても体のあちこちが痛い。頑張りすぎて眠たくなってきた

なあ・・・。

杉 すまん

「気絶したか、コイツを始末したらもう1人の方に行くぞ」

「了解。」

彼女は手を離し、僕は下に落ちていく。彼女は両肩にある大型カノンを砲口を

僕にむける。

「死ね」

大型カノン砲は発射された。

ドゴン！

あたりは煙に包まれた。

「和—————！！！」

（あれ、ここは何処だろう？たしかあのISに負けて……その後どうなったんだろう？

まあいいや。少し寝るとしよう……）

（……その体少し借りるぞ）

「AS発動」

「よし、もう1機のISの所に行くぞ」
「わかった。」

「……おい、どこに行くつもりだ」
「!?!」

彼女はとっさに煙が舞うほうに目を向け、呆然とする。
そこには殺したはずの少年がいた。

「なつ、何故貴様生きている!?!」
「……質問を質問で返すな」
「くっ!」

「死にぞないが!」
ISがこっちに向かってくる

「緊急シールドバッテリー、チャージ完了」

月光のシールドエネルギーが300になった。

「・・・月光の閃刃・朧月とブースト以外の機能を停止する。もちろん絶対防御の機能もだ」

そう告げると和矢の纏っていたフルスキンが消えた。

ガキンッ！

その危険な状態でISと切り結んだ。

「きさまどういっつもりだ、それでは1発でも当たったら終わりだぞ。」

それになぜシールドエネルギーがある。」

キンッ！

和矢は切り払いをして距離をおいた。

「・・・その心配はない、お前たちの攻撃が俺に当たることは絶対にない、

2つ目の質問については答えるつもりはない。

それに俺の目的は2分間敵の戦力を削りながらこの戦線を維持することだ。」

「くっ、きさまのその減らず口が叩けぬようにしてやる！」

月光に向かって猛スピードで接近し、

「これで終わりだ！」

彼女は右手を出し停止結界を発動した。

「・・・どうした俺はここだぞ」

「なっ！きさまいつの間に私の後ろに・・・ぐっ！」

閃刃・朧月で切りつけ、再度距離をおく。

「・・・なかなかいい操縦者だ。瞬時加速で敵に接近し、停止結界

で俺の動きを

止めて後方にいる仲間と連携して叩く、悪くない。

・・・だが同じ手が何度も通用すると思うな、ましてや俺に対して」

「大丈夫!？」

後方のISが近づく。

「大丈夫だ」

「しかしあの操縦者なんなんだ？それにさっきのは間違いなく瞬時加速だ。

初心者には絶対に使えない、まるで別人のようだ……………」

「…………時間か」

「チャージ完了!ツインバースト、発射!」

そのころIS学園は…………

「でやあああああつ!!」

ガキンツ!と鋭く重い金属音を響かせ、一夏と鈴は刃を交えて対峙する。

9月3日。2学期初の実戦訓練は、1組2組の合同で始まった。

「くっ…………!!」

「逃がさないわよ、一夏!」

クラス代表同士ということではじまったバトルは、最初こそ一夏が押していたものの

次第に鈴が巻き返しはじめていた。

その理由は明快。大2形態になった白式の燃費の悪さである。

「最初にシールドを使いすぎたわね！」

「まだまだあつ！」

そう行つて刀を振り鈴に接近しようとする、そのとき

「ドゴーンッ！」

第3アリーナに地響きが起きた。

「なんだこの音は!？」

「なんなのよ!？」

動揺する2人。

「みなさん、大変ですよ！」

山田先生が走ってきた。

「どうした、山田先生」

織斑先生は言う。

「誰かが上空から遮断バリアを壊そうとしています！」

「生徒は避難しろ！専用機持ちが集まれ」

あたりは騒然となる。

俺達は織斑先生の所に集まる。

「集まったな、手短に言う。今遮断バリアは壊されようとしている。

お前達にはここに来る

ISを迎撃してもらおう。

しかしまだ遮断バリアは破壊されてないが、念のためだ」

「ところで相手は誰なんだ？」

「今から30分前、IS研究が何者かに襲撃された。たぶんその襲撃者と思われる。」

陣形を確認しておく。

フロントがラウラ、篠ノ之、バックアップはデュノア、セシリアだ。鳳と一夏は待機だ。いいな」

「わかりました」

「なんで遮断バリアが壊れない！やはり1次移行してないからか！杉は頭をかかえていた。」

「・・・やはりそうだったか」

後ろから和矢が来た。

「和、きたのか。それにやはりってどういうことだよ！？」

「・・・確かにお前のツインバーストは威力は高い。しかし1次移行していないことで本当の威力の半分も出せていない」

「確かにそうだな。ていうかお前和なのか？」

「・・・そんなことどうでもいい。今から俺が遮断バリアを破壊する」

「そんなこと出来るのかよ！？」

「・・・いいから黙ってみてろ」

和矢は閃刃・朧月を上にかかげた。

「・・・閃刃の第一機能を解放」

「第一機能解放」

そういつと銀色の月光の体がさらに光を増していき、朧月のシールドコーティングされている部分が10メートルも伸びていった。

「・・・閃刃・朧月夜、斬り裂け！」

朧月夜を振りおろす。

バライイイイイイイイン！！！！

遮断バリアが壊れた。

「いくぞ！IS学園に！」

「よかったの？あいつらを逃がして」

「ああ、軍も来ているしまた会える・・・今度こそやつらを始末してみせる！」

2人はIS学園に向かう。

2人運命はいかに。

お前は誰だ！！（後書き）

感想ください

突入（前書き）

続きです。

突入

煙が立ち上っている。

「到着したようだな。それにしても煙たいぜ」
杉は言った。

「・・・ISを6機確認、内の1機がこちらに接近中だ」
「マジかよ!？」

煙の中に1番に飛び込んできたのはシュヴァルツェア・レーゲンと
ラウラ・ボーデヴィツヒだ。

和矢はラウラの攻撃を閃刃で受け止めた。

「・・・煙の中に躊躇なく飛び込んでくるとはな」

「貴様がIS研究所の襲撃者か。たった2機でこのIS学園に来るとはご苦労なことだ」

「・・・襲撃者か、そう思われるのも無理はない」

「和、俺らは戦う為に来たんじゃない。今から学園にハッキングするからもちこたえてくれ」

「・・・そのつもりだ。」

「その姿なぜアーマーをつけていない?それに操縦者は男か?」

和矢は煙の外に出て行った。すると紅椿と篠ノ之箒も突っ込んだ。た。

「はあああああ!!」

和矢は咄嗟に攻撃を避ける。箒もこの姿を見ると、

「お前、なぜアーマーを付けてないんだ。それでは・・・」

「・・・その質問は聞き飽きた」

「織斑先生、あのアーマーを付けていないISはどうしますか?」

ラウラは織斑先生に話していた。

「お前の停止結界で捕獲するんだ」

「了解しました」

ラウラはプライベートチャンネルを使って、

「これから戦力を分断して敵機と戦う。上空にいるISは私とシャルロットで、地上にいるISは残りの2人だ。わかったな」

「了解だ」 「わかったよ」 「しかたがありませんわね」

篤、シャルロット、セシリアは答える。

お互いに指定のされたISにの所に行く。

「シャルロット、私が停止結界で動きを止めてあのISを捕獲する。」

「わかった、いくよラウラ！」

シャルロットが実弾マシンガン、ラウラはワイヤーブレードを使って攻撃してくる。

その2つともをたくみに避ける。

「シャルロット、あのISは機動性がかなり高いぞ！注意しろ！」

「わかったよ」

シャルロットはライフルに持ち替えて狙撃してくる。俺は右に避けた瞬間、

「もらったぞ！」

俺が右側に避けることを予測していたラウラは隙を突いて右手を出して停止結界を発動した

・・・が

「・・・その攻撃はもう見飽きた」

俺は前の戦闘と同じように瞬時加速を使いラウラの後ろに回り込んだ。

「バカな！？私の停止結界をかわすだと！」

「・・・まだまだヒヨっ子だな」

俺は後ろから閃刃で斬りまくった。

「ぐっ！」

ラウラのシールドエネルギーがどんどんなくなっていく。

「ラウラさがって！」

シャルロットはマシンガンに持ち替えて上から撃ってきた。

「・・・邪魔だ！」

俺は瞬時加速で弾丸を避け、シャルロットを斬り上げた。

そのとき！

「うおおおおお！！！」

残りシールドエネルギーの少ない一夏が白式の零落白夜を使って突っ込んできた。俺はそれを

閃刃で受け止めた。

「・・・シールドエネルギーが残り少ない状態で特攻してくるとは面白い奴だな」

「お前たちの目的はなんだ！」

「・・・この学園に保護してもらったために来たと言えば信じてくれるか？」

「ふざけるな！」

「ふざけてはいない。それにそろそろ時間のようだ」

そついうと月光のシールドエネルギーが0のなり、地上に落ちて行った。

(・・・お目覚めの時間だ)

「AS終了」

20分後・・・・・・・・

「杉、僕ら確かIS学園に保護してもらったためにここに来たんだよね？」

「ああ」

「それなのになんで僕らは手錠で繋がれているの？」

「それは俺らが投降せずにそのまま戦闘を行ったからだ敵襲と思われたんだろ。やはり武装を解除すれば良かったぜ」

「だったら最初からそうすれば良かったじゃないか！」

「お前だって賛同したじゃねえか！」

「そっち系は杉の分野じゃないか！」

「だまれバカ！」

「なんだと！てめえ表に出やがれ！」

「お前ら静かにしろ、今お前達の身元確認を急いでる」

「はい」

僕は怒られ小さくなる。

今の状況は2とも手錠で縛られた状態で座らされ、目の前には怖い顔をした教師が座ってる。後ろには

6人の生徒が立っている。多分さっきのISに乗っていた人たちだろう。

なんか気まずいなあ。

「ではもう一度確認する。お前達の名前は弓弦和矢ゆみづるかずやと杉崎晃生すぎさきこうせい2人とも

16歳。知り合いのIS研究所に行くはずが間違えて隣の研究所に行ってしまった、そこでIS研究所を襲った襲撃者と接触、逃げている途中ISを発見しISを起動させて研究所から脱出。

その後この学園の遮断バリアを破壊して私の生徒たちと戦闘して今に至る。これで間違いないな？」

「はい」

僕らはまたも小さくなる。

なんか僕らがすべて悪いって感じだなあ。

またもや沈黙する。

「納得がいきません教官！」

ラウラが後ろから意見する。

「織斑先生と呼べ」

「すみません織斑先生、しかし私の意見を述べると彼らは男です。

男でISに乗れるなんてめったにありませんし

2人同時なんて、それに私はその男と戦いましたがとても初心者

とは思えない強さでした。」

「僕もそれには賛同します」

シャルロットも共感した。

何か照れるなあ、でも……

「あのー、それについてなんですけど僕そのときの記憶がまったく

ないんです。気がついた時にはこの学園

にいたんですけど……」

その言葉を聞くと生徒たちは啞然としていた。

あれ？なんか僕悪い事言った？

「だが貴様！……」

「ラウラそのことは後から調べる、それから弓弦に聞くが何処まで覚えていてる？」

「えーと、たしか襲撃者にシールドエネルギーを0のされてポコポコのされたあたりですかね」

またもや啞然となる。なに？なんなのこの状況……

「お前俺のチャージが完了するまで持ちこたえたんじゃないのか！

「？」

「なことでできるか！2対1だぞ！死を覚悟したわ！」

そのときプリンのような胸をした教師が入ってきた。

「織斑先生！わかりましたよー、IS研究所の監視カメラを調べたら彼らの言つとおり襲撃者がいました。」

彼らの身元の合っていました。研究所の人の証言もあり彼らは無実です」

「わかった、ありがとう山田先生」

織斑先生はそういった。

「やったよー、やっとこれで僕達も帰れるね」

僕はうれしそうに言つと、

「お前何言つてんだ、もう俺らはあの学校にも戻れないぞ」

「……………えっ？どついうこと？」

「俺らはこの学校に転入することになる」

「……………」

逃げよう！……！

つじく……！……！

突入（後書き）

次回逃亡

感想をお願いします。

悪い点と良い点をお願いします。

解説（前書き）

他にも登場人物は出てきます。

解説

解説

登場人物

弓弦和矢（ゆみづるかずや・16歳）

性格：天然＋運動バカ〃ス〇ク 二重人格 ヘアーカラー茶色のシ
ョート

搭乗機：月光（メインカラー：銀）、第二世代

another system：人格が変わり、ISの機動力U
P、ISとの適合率100%以上、

武装：長剣1本のみ（AS時：双剣、長剣、ライザーソード〔仮〕
）

杉崎晃生（すぎさきこうすけ・16歳）

性格：無気力、ときどき真面目 ヘアーカラー金髪セミロング

搭乗機：鳳仙火（メインカラー：水色）、第五世代

武装：ツインライフル、シールドビット12基、ツインハンドガ
ン、大型ライフル2丁

解説（後書き）

そのことはまたのご機会に

逃亡前編（前書き）

「お前何言ってるんだ、もう俺らはあの学校にも戻れないぞ」

「……………えっ？どっいうこと？」

「俺らはこの学校に転入することになる」

「……………」

逃げよう！……！

逃亡前編

次回 逃亡

「し、死ぬってラウラさん！」
「殺してやる！！」

ラウラが追いかけてくる。

助けてええ！！

なぜ僕がこんなことになっているかというところそれは20分前のこと……

「とりあえずお前達の手続きはすんでいる。山田先生後はよろしく頼む」

「わかりました」
織斑先生はそう言っただけで部屋を出て行った。

「2人とも織斑君達の紹介がまだでしたね。彼らが1年の専用機持ちの人達です。」

それでは順番に自己紹介してください」

「織斑一夏だ」

「セシリア・オルコットですわ」

「篠ノ之箒だ」

「シャルロット・デュノアです、よろしく」

「凰 鈴音よ」

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「では自己紹介が終わりましたのでお部屋案内します」

山田先生はそういつて僕らを部屋に案内していく。

「杉、お願いがあるんだけど」

僕は小声で言った。杉も小声で、

「お前の言いたい事は分かる、ここから逃げ出したいんだろ。いいだろう、俺も

前の高校がいいからな。駄目もとでやってみるか」

「でもどうやって逃げるの？」

「ここは2階だ、飛び降りるぞ」

「了解」

僕らは歩く速度を落とし、山田先生が先先進む。僕等はこっそり窓から飛び降りた。

山田先生が後ろを振り返ると僕達の姿はなかった。

「あれ！？弓弦君と杉崎君はどこへ？まさか逃亡！？」

「うまく逃げられたね」

「そうだな」

「これなら簡単に逃げられそうだよ」

「そうもいかないようだ」

杉がそういつと校内全域に放送がながれてきた。

「生徒の全員に伝える」

この声は織斑先生だ、どうしたんだろう。

「この校内に不審者がいる。2人組の男で名前は弓弦和矢と杉崎晃生だ。」

1年の専用機持ちは見つけ次第直ちに確保しろ、以上だ」
放送が終わる。僕は呆然とする。

「和、走るぞ」

「わ、わかった」

僕は走りだす。走っていくと、

「まてお前達！」

目の前はISを装着したラウラが立ちはだかる。

「くっ！ラウラさん」

「もう来たか！」

向こうはISを装着している。しかし僕等はいま学園にISを取り上げているんだ。くそ！

「どうする？杉」

「俺にまかせろ」

「学園から逃げるとはバカな奴らだ」

「ラウラ、お前はなにか勘違いしている。俺はバカじゃない、バカなのはこいつだけだ！」

「せめて運動バカと言って！少しはバカが軽減されるから！」

「そこまで変わってないぞ」

「おしゃべりは終わりだ。おとなしく来て貰おう！」

ラウラはワイヤーブレードを出した。

早くも逃亡終了！？

「ラウラ、一夏からの伝言を預かってる」

杉がそう言つとワイヤーブレードが止まる。

「なんだ、その伝言は。大切なことか？」

「ああ、一夏がお前にどうしても伝えたいことがある。すぐに保健室に来てほしい、来るまでずっと

待っている・・・ということだ。早く行ったほうがいいんじゃないのか？」

ラウラの急に顔を真っ赤になった。

なんで顔を真っ赤にしてるのかな？

「し、しかし私は任務の途中だ。お、お前達と捕まえなければならぬ

「そんなの他の奴に任せればいい、行って来いよ」

ラウラが考えて出した言葉は、

「わ、わかった。」

行っちゃうんだ、おかしくない。嘘見え見えだと思っただけだ。

ラウラはまだ赤面のままISを解除して走って保健室に向かっている。

だからなんで顔を赤くしてるの？わけがわからない。

「いくぞ和」

「ねえ杉、それ本当の話？」

「嘘に決まってるだろう。いいから急ぐぞ」

僕等はふたたび走りだす。

「和、慎重に進むぞ」

「わかった」

僕等は隠れながら進む。

「そろそろ正門だ。気を引き締める。」

「わかってるよ、お前こそ気をつけるよ」

「誰に言ってるんだ」

ゆっくりと慎重に進むそのとき、

「貴様等ああああ！！！！」

血管を思いつきり浮かび上がらせたラウラがやって来た。

まずい、嘘がばれたんだなあ。

「貴様らに言われて急いで保健室に行ってみたのはいいが閉まっていた！私を騙したな！！」

「やばいよ杉！」

「俺に任せろ。次の手は打ってある」

「なんか頼りないなあ」

「今から俺の言う事を真似してくれ」

「わかった」

杉は小声で言い始める。

（ラウラ、お前に言いたい事がある）

「ラウラ、お前に言いたい事がある」

（あんな単純な嘘に引つかかるとはお前こそバカだな）

「あんな単純な嘘に引つかかるとはお前こそバカだなんっ？なんかおかしくない？」

「バカだと！貴様ああ！！！！」

「杉！すごく怒ってる！この作戦ホントに大丈夫！？」

「いいからつづけるぞ」

杉は強引に進める。

（お前みたいな奴が同じ学年だとは）

「お前みたいな奴が同じ学年だとは」

(もう一度小学校からやり直してこい。バーカバーカ)
「もう一度小学校からやり直してこい。バーカバーカってお前がバカだ!!」

途中で言葉を変える。

(だが君のそんな純粹さ好きだ)

「だれが言うかアホ！それに順番間違えてない!？」

「これでいいんだ」

杉のバカ!・・・はっ！なにこの後ろからくる殺気は！

ふりかえるとそこにはドス黒いオーラをまとったラウラが1人。

「ラウラさん？これは杉が考えたことであって、けして僕が・・・」

ビュンツ！ ドカンツ！

大型カノンが僕のすぐ横を通り過ぎて爆発する。

「殺してやる」

「何て言っただんですか？ラウラさん」

「殺してやる!!」

「ひい！杉どうにかして！っ杉がない!」

「和、後か任した!」

「貴様！1人で逃げるつもりだな!」

「先に天国に行ってる」

「お前は地獄だ!」

「殺してやる」

「そんなこと言ってる場合じゃない、ダッシュ!」
「ウターンして走っていく。」

ということだ。

どうすればいいんだよ。

「殺してやる！」

「なんか目的変わってない!？」

「うるさい!よくも私の乙女心をもてあそんでくれたな!」

「乙女心ってあったの?っそんなのどうでもいい!本当にヤバイっ
て!」

ラウラは大型カノン砲を撃ってくる。僕はとっさに避ける。

初めて運動バカでよかったって思ったよ。でもシヤレにならないも
のがきたよ!

ラウラは今度はワイヤーブレードを使ってきた。

それは避けられないよ・・・

僕はワイヤーブレードの1発めは避けたけど次々と来るワイヤーに
捕まって手足を縛られていく。

ラウラが近づいてきた。

カノン砲を向けて、

「死ね!」

ラウラ!僕IS付けてないですよ!!

「そこまでにしろラウラ」

カノン砲が止まる。

「織斑先生!」

「まったく、気になって様子を見に来ればこんなことになっているとは。弓弦を連れてこい」
「わかりました」

織斑先生はまたどこかへ行ってしまった。

よくやってくれたよ織斑先生！ぐふっ！

ラウラは和矢の腹を蹴りあげた。

「ふんっ、早く立て」

なぜ蹴るの!？

僕は腹を押さえながら後をついて行く。

もしこの学園に入ったとしたらうまくやっていけるのかな？

僕はそう思った。

逃亡前編（後書き）

感想ください。

次回 逃亡後編

逃亡後編（前書き）

感想ください。

逃亡後編

僕はラウラの後に付いて行った。ちょうど廊下のところを歩いて行くところには見慣れた顔がいた。

僕が殺されかけた原因を作った杉崎晃生である。

「杉、貴様ああ！」

「おう、和生きてたんだなあ。悪運の強い奴だな」

「危うく死にかかったんだぞ！つて杉はどうやって捕まったの？」

「正門まで行けたのはいいが待ち伏せされて捕まった。」

「自業自得だね。それだけで済んだだけでよかったじゃないか。あのあと大変だったんだよ！」

「純粋な乙女心を傷つけたからだ。なあラウラ」
杉が言った。

「そうだ。こいつのせいで、こいつのせいで！」

「ラウラさん！？なぜISを装着してらっしゃるのですか？待って！僕は無実だよ！」

「ラウラ、落ち着いて。一夏の前でそんなことしちゃダメだよ」
シャルロットがラウラを止める。

「だが………」

「ラウラ！」

「………わかった」

ラウラはISを解除して下を向いて小さくなる。

大人しいラウラは可愛いな。なんで僕が嫌われているの？本当は杉のせいなのに……

「ところで早く織斑先生の所に行かなくていいの？」
後ろから鈴が言ってきた。

「そうですね。みなさんはやく行きましょう、みなさん」
セシリアもそう言う。

「じゃあいこうか。2人とも付いて来いよ。」

「俺のことは杉崎でも杉でも好きなように呼んでくれ。後こっちは
バカと呼んでやってくれ」

「和矢！僕の名前は和矢！杉、変なこと言わないでよ」

「わかった。これからよろしくな杉、和矢」

「よろしく」

僕等は織斑先生の所に行った。

「で、お前ら何か言い訳があるか？」

「ありません」

僕等は織斑先生の前でまた小さくなる。

「IS学園を抜け出そうするとはな」

「でも……」

「ISを操縦できるものは……IS学園はそれを保護する義務
がある。義務は権利とは違い絶対だ。」

杉は織斑先生の説明に割り込む。

「どうということなの？」

「要するにわかりやすく言うともしIS学園から逃げると軍を派遣
して俺たちを捕まえに来る。逃亡なんて

絶対無理ってことだ」

「なんで最初から言ってくれないのさ！」

「面白そうだったからだ」

杉は説明した。

「杉よく知ってるね」

「俺はISに興味があったからな。お前が学校で寝ているとき俺は真面目に勉強してたからな」

「とりあえず手続きは済んである。山田先生に付いて行って部屋に案内してもらえ。後から反省文を提出してもらっぞ」

「「わかりました」」

僕等は山田先生とともにIS学園の1年寮に向かった。

「もう逃亡なんてだめですよ」

「わかりました」「了解」

僕らが部屋に着く前、女の子が部屋からたくさんでてきた。

「何？あの男の子たち」

「まさか新しい転校生？」

「金髪のセミロングと茶髪のショートかあ。」

「みなさんどいてください」

山田先生は必死に道を作る。

「どうしたの？まやまや」

動物のパジャマを着た女の子が来た。

「布仏さんその名前はやめてください！」

「いーじゃん、ところでその人たち誰？」

「新しい転校生ですよ」

「へえー、どうものほほんだよ！よろしく転校生さん」
のほほんさんがあいさつしてくる。

「よろしく、のほほんさん。僕は弓弦和矢だよ、その寝巻可愛いね」
「ホント！？嬉しいなあ。」

「和矢君行きますよ」

山田先生が呼んでる。いかなくちや

「じゃあね、のほほんさん」

「じゃあねえー」

「いいなー、早くもお近づきなれて」

「いいでしょー」

僕は目的の部屋の前に来た。

「ではこれからどちらがこの部屋にするか決めてください」

・・・・・・へ？

「たしか1部屋2人じゃなかったのか？」

「この部屋は一夏君がいるので1人は一夏君と一緒にもう1人は他の部屋ですね」

2人はそれを聞くと、

「じゃあ僕がこの部屋にするから杉は他の部屋で」

「いや、俺がこっちでお前があつちだ」

2人とも一緒になった。

「杉、こんなときはじゃんけんで決めようよ」

「いいぜ、やってやるうじゃねえか」

2人とも構える。

杉はいつもチヨキを出すから、

「最初はグー！じゃんけん……………」

もらったー！……………」

その瞬間、杉のチヨキが僕の目を貫いた。

「目が！目があー！」

「じゃあそーいうことだ」

「ずるいぞ、杉！」

「素直に認める」

「あんなんで認められるかバカ！」

まだ目がズキズキする。くそー、覚えてろ杉！

「では和矢君は新しい部屋を使ってくださいね」

……………へ？

「和！貴様凶つたな！」

え？これって儲けもん？

「ま、まあこれくらいば、僕にかかればこ、こんなものさー！」

「お前嘘が見え見えだぞ」

「では行きましようか和矢君」

「じゃあね杉」

「くそー！」

僕は杉達の部屋を後にした。

「ここが和矢君の部屋です。荷物は今日保護者から受け取ったので今日はゆっくり休んで

明日から学校に来てください。それでは」

「山田先生は部屋を後にする。

「しかし広いなあ。まあ今日は疲れてたから早く寝るか。

僕はシャワーを浴び、服を着てベットに入った。

「明日から新しい学校か。緊張するなあ・・・

そして深い眠りについた。

朝になった。

「うーん、もう朝か。ついさっきまで寝たと思ったのに。ていうか今何時？」

僕は時計を見た。

8時10分・・・・・・・・・・

「しまった！寝坊したー！ー！ー！ー！ー！」

「初日から遅刻なんてやばいよー！」

僕は急いで着替えて部屋を出た。そのときもう時刻は8時30分。
ヤバイヤバイ

僕は走って指定の教室にダッシュする。

ほとんどの生徒が女性でわけのわからないISの勉強をする学校

ホントに僕大丈夫なのかな？

逃亡後編（後書き）

次回 新しい学園

新しい学園（前書き）

すみません。友達が書かないので遅れました。

新しい学園

僕の指定された教室は・・・1-1。
急ごう！

その頃1-1では

「今日はSHRを始める前に転校生を紹介します」
山田先生がそう言うと教室が騒がしくなる。

「転校生って昨日の男子？」

「このクラスって転校生多いくない？」

「でも嬉しいよね」

「お前ら静かにしろ」

織斑先生が言うと静かになる。

「それでは入って来てください」

1人の男が入ってくる。

金髪のセミロング。杉崎晃生だ。

「それでは自己紹介してください」

「杉崎晃生だ。俺のことは杉崎でも晃生でも好きなように呼んでくれ。これからよろしく頼む」

「あれ？杉崎君、弓弦君はどうしたんですか？」

「あいつのことだ。寝坊して初日から遅刻だろう」

「はあ……とりあえず杉崎君は一番後ろの空いてる席に座ってください」

「わかりました」

変わって和矢はというと……

「ここ何処！？この学園広すぎるよー！！」

迷っていた……

僕は廊下を歩いていた。

そこで僕はある場所にたどり着く。

生徒会室だ。

僕はそつと生徒会室を覗いた。

「はあ、誰もいないなあ、どうしよう」

「誰かいたらどうするつもりだったの？」

「1-1の場所を教えてもらおうと思ったんだけど……って」

僕は後ろを振り向くと扇子を持った1人の女性がいた。

「あのー、どちら様でしょうか？」

「あなたが1-1の場所を聞こうとしていた人よ」

「てことは生徒会の人ですか？」

「ただの生徒会のメンバーじゃないわよ。私はこの学園の生徒会長

よ。

弓弦和矢君」

「どうして僕の名前を知っているんですか？ってヤバイ！時間は・・・」

8時50分。もう1時間目始まってるよ、どうしよう！」

「とりあえず生徒会室に入りましょう」

「どうしたらこの会話からそんな答えが出てくるの!？」

「フッフ、面白いわね、弓弦和矢君って」

こんな会話をしていると、

ぐうー・・・

そうだった、僕は今朝ご飯食べてなかったよ。

「生徒会室に美味しいケーキがあるんだけどなあ。どう？」

「お邪魔しまーす」

僕は生徒会室に入っていった。

「はい、どうぞ」

ケーキと紅茶を置いてくれた。

「ありがとうございます。それじゃ、いただきます
僕はケーキを口にいれる。

「これ美味しいですね」

「そう、それは良かったわ」

「会長も一口どうですか？」

「あら、ありがとうございます。じゃあ貰おうかしら」

僕はケーキをフォークですくい、そのまま会長の口に入れた。

「美味しいわね。でもこれって間接キスっていうんじゃないの？弓弦和矢君」

「僕そういうの気にしないんで。後、僕のことは和矢でいいですよ。会長の名前ってなんですか？」

「私は更識楯無よ。後、和矢君って鈍感なのね」

「よく友達に言われます。意味がわかりませんが・・・」

「そういうところを鈍感って言うんだけどな」

「んっ？何か言いましたか？」

「なんでもないわよ。とりあえずそろそろ行きましようか。1組は2組と」

アリーナで合同授業だったわよね」

「よく知ってますね」

僕は楯無先輩と一緒にアリーナに向かった。

またまた変わって一夏はというと・・・

「これから模擬戦を始める。杉崎とデュノアは前に出る」
織斑先生がそう言っていると杉崎とシャルロットは出てくる。

「よろしくね杉崎君」

「こちらこそよろしく頼む。それと晁生でいいぞ」

「わかったよ、じゃあ始めようか」

2人はISを起動して上昇する。

「それでは模擬戦始め！」

はじめに動いたのはシャルロットだ。

お得意のラピットスイッチでマシンガンを2丁持ち撃ってくる。

杉はマシンガンを避ける。

シャルロットはすかさずライフルに持ち替え追撃にかかる。

「くっ、ビット！」

杉はビットを出し防ぐ。しかしすべての実弾は防ぎきれず杉に当り、シールドエネルギーが減っていく。

「晁生やつ防戦一方だな。これはシャルだ有利だな」

一夏は今の状況を見て言った。

「当たり前だ、シャルロットがあんな奴に負けるわけがない」

ラウラは言った。

「まだわからないぞラウラ」

織斑先生が会話に入ってきた。

「それはどういことですか織斑先生」

「いずれ分かる」

「どうしたの昇生、守ってばかりじゃ勝てないよ」
シャルロットは杉に言う。

「大丈夫だ。これも作戦の内だ」
・・・まだか!?

「悪いけどこれで決めさせてもらっよう！」
シャルロットは『あれ』を出した。

楯破り『シールドスピア』だ！

シャルロットは杉に接近してきた。

杉はライフルを出し撃つ。

しかしライフルを避けながら瞬時加速で急接近してきた。

「これで終わりだよ！」

まだなのか！

もう終わっちゃうのか！

そのとき、

杉のISが光った。

「1次移行完了」

「まさか昇生って1次移行していなかったの!？」

「そういうことだ。勝負はまだこれからだ。いくぞ、鳳仙火！」

そう言った後、杉はシールドライフルを2つ持って反撃を始める。シャルロットはかわしてもう一度シールドスピアを使おうとしている。

「!?!」

シャルロットは瞬時加速を使い急接近した。

「今度こそ!」

杉はビットを五枚重ねガードする。

ビットを1、2、3、4とビットが貫通していく。そして5番目のビットも貫通して俺を襲う。

「!?!」

俺は一瞬で距離をおいた。

「それって瞬時加速!?!」

「初めて使ったよ。それにチャージ完了だ」

杉は2つのシールドライフルをつなぎ合わせ、

「ツインバーストライフル!最大出力」

シャルロットに向かっていく。

シャルロットは瞬時加速で避ける。

「たしかに速度は速いけど軌道が丸見えだよ」

「それはどうかな。後ろに気を付けるよ」

「？」

シャルロットは振り向くと後ろからさつき避けたはずのバーストライフルがシャルロットを襲う。

ドカーンッ！！

煙がまい、シャルロットは落下して地面に降り立った。

「そこまで！2人ともISを解除しろ」

織斑先生がそういうとシャルロットと杉はISを解く。

俺らは一夏のもとへ行く。

「それにしても甦生すごいよ。僕びっくりしちゃったよ。だって避けたはずのシールドライフルが戻ってくるんだもの」

「だよなあ、俺もびっくりしたよ。あれはなんなんだ？」

一夏は杉に言った。

「SRC、通称シールドリフレクトコーティングだ。俺のISに書いてあった。

名前の通りシールド系の攻撃を反射させることだ。」

「へえ、すごいなそれ」

そうやって話していると、

「すみません、遅れました！」

バカが来た。

「和、お前どこで油売ってた？」

「いやー、ちよつとあつてね」

「それより鬼が来たぞ」

僕は後ろを振り返ると、

バシンッ！

頭に激痛がきた。

そこには織斑先生が立っていた。

「弓弦、今までどこに行っていた」

「織斑先生これには深いわけがあつて」

「とりあえず口周りに付いた生クリームを拭いたらどうだ」

「しまった！ちゃんと拭いたはずなのにつてはっ！」

「お前は道に分からなかったと言いながら呑気にケーキを食べていたと」

「先生！80%合ってますけど残りの20%弁解させてください！」

「ラウラ、弓弦と模擬戦をやれ。ボコボコにしても構わん」

「わかりました」

「先生！さっき教師を疑い言葉が聞こえたんですけど」

「始め」

「おい無視か！」

僕がそう言っていると

ビュンツ！

ドカンツ！

僕の右頬すれすれに大型カノン砲が通り過ぎた。

「ラウラさん、僕まだIS装着してないんだけど」

「知ったことか、覚悟！」

プラズマ手刀で接近してきた。

「ちょ、ちょっと！死ぬって！」

そういつといきなりISが装着され、ラウラと切り結ぶ。

あれ？なんでISがってそんなことはどうでもいい。

とりあえず距離をおこう。

僕は距離を取り、相手の出方を伺い。

ラウラはワイヤーブレードが襲ってくる。

僕はワイヤーブレードを掻い潜るが足を掴まれ、そのまま壁に激突させられる。

くそっ、このままじゃなぶられるだけだ。そんなの納得いかない
1撃でも当てないと気がすまない。

「瞬時加速！」

一直線に閃刃を持ってラウラに突っ込んでいく。

「軌道も考えずに突っ込んで来るとは昔の一夏だな」

ラウラは右手を出し、あれを出した。

「!?!」

僕の体は動かなくなった。

「これってあのときの!?!」

「これで終わりか、つまらんな」

ラウラは大型カノン砲を僕に向けた。

これって初めてEISと戦ったときと一緒だ。
また負けるのか、僕。
何もできないまま

そんなの………

いやだあああ!!!

そのとき周りが真っ暗になった。

ここは何処？それに僕ラウラと戦っていたんじゃない……

(……また来たか、弱き者よ)

その人は黒い髪のロングで右手は閃刃を持っていた。

(あんた誰だよ？それにここ何処だよ？)

(……お前が知ることではない。それにお前が俺を呼んだんだ)

(僕が呼んだ？ どういうこと？)

(……長話をしている暇はない。お前はそこで見てろ)

(見てろって何を？)

(……お前が望んだ力だ)

(AS発動！)

ドカンッ！

ラウラのカノン砲が発射された。

「終わったか」

「・・・まだ終わりじゃない」

「!?!」

ガキンッ！

ラウラはとっさにプラズマ手刀で再度閃刃と切り結ぶ。

「バカな!?!直撃したはずでは」

「・・・第2ラウンド開始だ」

新しい学園（後書き）

次回 カVSラウラ

これからは僕が書くかもしれませんが。
無理矢理でも友達に書かせますけど

カV Sラウラ（前書き）

展開を早めます。今回だけ

カVSラウラ

ラウラは俺を見て驚愕している。

「……まあ当然のことか。あれをまともにくらっていたら終わっていたからな。」

それにまたお前とはな。妙な縁があるようだ」

「まただと！？貴様あの弓弦か？」

「……何回も言わせるな。お前に答える必要はない。それより早く始めるぞ」

「くっ！答える気がないなら力づくで聞きだすのみだ！」

ラウラはそう言ってアンカーブレードを出した。

俺はラウラに接近しつつ、襲ってくるアンカーブレードを1つ、2つと

破壊していく。

閃刃とプラズマ手刀がぶつかり合う。

「……どうしたそんなものか。所詮は量産化が進んでないドイツの第3世代だな」

「だまれ！第2世代のISが調子に乗るな！」

アンカーブレードで俺の脚を抑えた。

「この前は避けられたが今日はそうはいかない！」

右手を出し、停止結界を発動させる。

・・・そして月光の動きが止まった。

「今度こそ逃がさん！」

2つのカノン砲を使って最大出力で俺に向かって発射した。

ドオオオオン！！

「今度こそやった！！」

ラウラは下を見ている。

そこには地に落ちた月光がいた。

「そこまで！ラウラと弓弦はISを解除しろ。

なお弓弦は後で着替えたら職員室に来るように、以上で1時間目の模擬戦を終わりと

する。」

「・・・まだ終わりじゃない」

「ん？なにか言ったか弓弦」

織斑先生が言った。

『緊急シールドバッテリーチャージ完了』

シールドエネルギー0の月光が再び動き出した。

「……まだ終わりじゃないと言ったんだ」

「なんだと？」

「織斑先生大変です！」

山田先生が通信で呼びかけてきた。

「どうした？」

「月光のシールドエネルギーが回復しているんですけど！
そんな機能この前調べたときはなかったのに」

山田先生は慌てている。

「……さっきのは驚いたぞラウラ。」

「ありえない！予備バッテリーなしでどうやって
紅椿のワンオフ・アビリティでもあるというのか！」

「能書きはいい。そろそろ終わりにしよう」

『第3形態閃刃・双月』

月光の閃刃が輝き、分裂し2つとなった。

「……たとえばどんなことがあると……
切り刻む！」

ラウラに目にもとまらないはやさで接近した。

「瞬時加速！？早すぎる！」

「……大丈夫だ。すぐに終わる」

最初は肩に付いているカノン砲を壊した。

「くっ！ちょこまかと！」

ラウラはもう一度停止結界を発動させたが目の前に和矢の姿はなかった。

「……そのお飾りのISを切り刻む！」

2つとなった閃刃を交差させ振り放った。
閃刃は絶対防御を貫通しラウラのシュバルツエア・レーゲンはバラバラに切りきざまれた。

「あっ！」

ラウラは驚愕する。

・・・俺は疲れた。少し眠らしてもらおうとしよう。

男はそのまま去っていく。

(待って！君の名前は？)

(・・・俺はお前だ・・・)

奇跡加津佐だ。俺の名前は)

戻ってアリーナ・・・

「ラウラアアア！！！」

お願いだ、間に合ってくれ！

月光のISが解除され、生身同然となった僕は落下していくラウラを追いかける・・・

ラウラを抱きかかえた。

「！？」

いきなりこのことで驚いているラウラ。

「絶対に助けるからな、ラウラ」

ラウラに向かって頬笑み、

どおんっ！！！！

僕はラウラを抱きかかえたまま地上に落ちた。

カVSラウラ（後書き）

見てくれてありがとうございます！

自分が書いという凄くべたかったです

気持ち悪くなりました

まあ気長に更新を待ってください

もしかしたら今回は更新が早いかも！

復活！（前書き）

トウシトウル

始まるよー！

復活！

「救護班を呼べ！」

織斑先生がそう叫ぶ。

頭が痛い……

上空からISを装備してない状態で落ちるなんて無理があったかな。

……

……それよりラウラは無事かな

僕少し前までラウラさんって言ってたのに、なんでだろ？

もうダメだ。意識が……

「ラウラ、和矢！大丈夫か」

一夏たちの来る。僕はもう意識を失っていた。

「私は大丈夫だ。……しかし弓弦が！」

ラウラは心配そうに和矢を見ながら言った。

「今、織斑先生が救護班を呼びましたから大丈夫ですわ」

セシリアが言った。

「でも！……」

それでもラウラは心配であった。

「心配するなラウラ。和は前にもこんなことがあったからな。死ぬなんてことは絶対はない」

杉はそう言った。

みんなは「前にもこんなことがあった」の言葉で？を浮かべている。

「すぐに分かる」

それから救護班に運ばれ、集中治療室に……

1年の専用機持ちたちが集中治療室の前の椅子に座って待っている。

ラウラの緊張はほぐれない。

みんな和矢を心配している。

なんだこの空気は……

仕方がない。

杉はため息をついて口を開いた。

「ラウラ、長くなると思うから俺がアリーナで言った意味を話してやる。」

みんなは顔を上げ、杉を見る。

「晃星、前にもあったってどういうことだ？」

一夏は杉に言った。

「それは俺たちがIS学園に来る前の学校でのことだ。俺たちが前の学校に入学して2カ月ぐらいたったときに起きたことだ。」

杉はすこしためらってそして、

「素性は隠すと同じクラスの女性がいた。その女性は恥ずかしがり屋でクラスで浮いていた。だからクラスでいじめられていたんだ。」

そう言つと一夏たちがだんまりした。

「けどそのいじめと晃星のいうこととどんな関係あるんだ？」

「その女性は飛び降り自殺をしようとした。」

やはり空気が重くなる。

「女性は屋上のフェンスを飛び越えて自殺をしようとした。教師が説得しようとしたが、女性は聞く耳をもたなかった。」

「教師の他にも生徒がいつぱいきていた。その中に俺たちもいた。和はこのことに驚いていた。」

「あいつは女性がいじめられていることを知らなかったんだ」

「でも2カ月の一緒のクラスなのになんで知らなかったのよ？」
鈴が言う。

「あいつは遅刻常習犯だからな。朝の黒板や教科書に落書きをされているなんて知りもしなかった。」

そしてこう言った。

「私は死ぬんです、死なしてください！ってな」

「そしたらあいつどうしたと思う？ 生徒や説得する教師をはね飛ばして猛スピードでその女性に向かって走って行ったよ」

「その女性は驚いて足を滑らして屋上から落ちた。そして驚いたのは和もフェンスを飛び越え、女性の後を追って落ちていった。」

「それでどうなったんだ」

ラウラはいまでも落ち着かない状態で聞いてきた。

「女性は擦り傷ですみ、和は脳の強打、右腕を骨折、意識不明の重体に陥った。」

「だがあいつは体だけは丈夫だから意識不明から2日後の俺が心配してお見舞い来た時はけろっとした顔で起きてたからスカイアツパ
ーしてやった。」

だから心配すんなラウラ。もしそれでも起きないようだったら俺が

フライングドロップして起こしてやる」

話が一通り終わったところでちょうど集中治療室のランプが消えた。

和矢がカートに乗って運ばれている。

まだ意識は戻ってない。

そのまま保健室に運ばれ、ベットに移し変えられる。

やはり和矢は目を覚まさない。

「ラウラはその席に座ってくれ。」

「いや、私は立っておこう」

「そう言うな、座っておけ。そのほうが和矢のためにもなる」

「なぜ私があいつのためなど!」

「まあまあ」

杉は無理やり席に座らせた。

「し、しかたがないな」

ラウラはやっと席に座ってくれた。

俺はシャルロットのそばに立った。

「ねえ晃星、なんでラウラを席に座らしたの？」

シャルロットは杉に聞いた。

「いやー、恋のキューピット役をしようと思ってな」

「？」

シャルロットは？という文字を頭に浮かべた。

「それよりも和が後10分で目覚めなかったら、フライングドロップ決行だな」

「それは早すぎなんじゃないかな」

シャルロットは言う。

「こんなバカに遠慮は無用だ」

それから1分、2分と時間が経ち、ついに決行1分前……

「さーて、そろそろかな」

杉は楽しそうに指をポキポキ鳴らしている。

「杉崎さん、あなたはただ単に弓弦さんを殴りたいだけではなくてセシリアは指摘する。」

この女鋭い…………でも半分はハズレだ。もう半分は…………

「そんなわけないじゃないか、セシリア…………おっと決行の時間だ。」

俺はベットの前に立ってゆっくりと深呼吸をする。
そして…………

「くたばれえええ!!」

俺は宙に舞い、肘を立て、そのまま和の腹に向かってGO!

「ぐふっ!」

懐かしいバカの叫び声が聞こえた。

和は急な激痛に驚き、素早く起き上がった。

「腹がああ、痛いいい!」

うめき声が聞こえる。

やっと起きたか…………

まあ心配はしてなかったけどな。

「苦痛のあ目覚めだな、和」

「杉、貴様! 僕に何をした!？」

「フライングドロップだ」

胸を張って言うてやった。

「なに自慢そつに言うてるんだ！この腹痛どつしてくれる!？」

「自力で直せ、前の時もそうしただろう」

「一発殴らせる」

「それよりも……」

杉はラウラの方向に指をさす。

僕は振り向くとそこには僕を見ておどけているラウラがいた。

「あ、その、弓弦……」

下を向き、頬を少しあかめながら言葉を口に出した。

「……」

僕はラウラを見ながら以前と黙っている。

「お、おい！聞いているのか」

「ラウラ！」

僕は彼女の名前を叫び、いきなり彼女を……

抱きしめた。

「な、な！」

ラウラは頬を真っ赤にそめて、
途切れ、途切れの言葉を口にした。

一夏や箒、鈴、セシリア、シャルロットまでもが顔を赤くしてしま
った。

だが俺だけはそんなことにはならなかった。

なぜなら俺はこんな展開になるのを予測していたのだ。

「あー、言い忘れていたがあの時その女性が来たときも和はこんな
ことをしていたなあ」

少しニヤけて明後日の方向に向かってしゃべった。

「貴様騙したな！」

和に抱かれながてなお真っ赤になりながら俺に言う。

「なにをおっしゃる。全部偶然だ」

「くっ！お、お前もそろそろ離れる！」

和矢から離れようとする。

「良かった、良かったよラウラ！君が無事で僕、心配で心配で！
後ラウラのIS壊してごめん！」

和矢はラウラをさらに強く抱きしめ同じことを繰り返し、謝罪をする。

「あ、ISについてはだいじょうぶだ。コアは壊れてなかったし、パーツもドイツから届けてくれる」

「そうなんだ……あつ！それと」

和矢はラウラを話した。

ラウラはやつと和矢に開放され、落ち着こうとしたつかの間、和矢の手がラウラの頬に触れた。

「わ！ な、何をしている！」

「ラウラ、どこかケガはない！？ 大丈夫！？」

和矢は頬、おデコ、手などいろいろなところを触って怪我がないか確認する。

「め、目立った怪我はない！ 誰かさんが体を張って助けてくれたからな！ っていうかいちいち触るな！」

ラウラが和矢の手をどける。

「良かったあ。」

和矢も落ち着いてきた。

「晃星、弓弦君って意外と大胆なんだね」

シャルロットがいう。

「あいつは鈍感でおバカだからな。それにこの学園にも和とは違った鈍感がいるだろ」

「まあね」

シャルロットはそう言って一夏のほうを見た。

「シャル、なんで俺を見るんだ？」

一夏がシャルロットに向かって言った。

「なんでもないよ」

シャルロットはちょっと膨れて返事を返した。

「？」

一夏はおかしな顔をしている。

こっちのほうも時間はかかるな……

俺（杉）はそう思ったのであった。

それはひとまずおいといて、今は……

「おい和」

「なに？」

「ラウラと模擬戦をやったあの時の説明をしてもらおうか」
その話を聞くとあいつは顔に似合わず深刻な顔をした。

「それは……………」

「私にも聞かせてもらおう」

織斑先生と山田先生が入ってきた。

「後半からお前は完全におかしくなっていた。その説明をしろ」

織斑先生はきつい目で僕を見る。

「実は僕にもあまりわからないんです……………」

「少しは知っているのだな。」

「はい、僕はラウラにカノン砲を撃たれた後あるところにいました」

「あるところ？」

「そこは月の光が眩しく、木も草もない広いところでそこに1人の男がいてその人は閃刃を持っていました。

そして彼は僕に黙って見てると言いました。すると月から何か見えて、そこには僕の体を使って戦っていた奴とラウラがいました」

みんなは

「それって二重人格って言うの？」

「まだそう決まった負けではありませんわ」

いろいろな話し声が聞こえる。

「それでその男は誰だ」

「彼は奇跡加津佐と名乗っていました。後、彼は疲れたから少し寝ると……」

「そうか、分かった。お前たちは早く教室に行け。もう2時間目が始まっているぞ。」

「……わかりました」「」

一夏たちは保健室を後にした。

僕も幸い足は無傷だったからベットから降りようとしたとき、

「弓弦、お前はこれから私たちと一緒に来い。お前のISを調べる。」

「わかりました」

僕は織斑先生たちと一緒にISを調べに行ったのであった。

復活！（後書き）

次回・・・決まっていな

更新は一週間後

なんなんだこいつ！（前書き）

すみません。これを書いている奴が展開を速くしすぎてます。

付いて行ける人は見てください。

トゥットゥル

始まるよー！

なんなんだこいつ！

僕のISを調べたが結果は悲しくも何も発見できなかった。

いったい奇跡加津佐というのは誰なのか、どうして僕のところにいるのか

なにが目的なのか？分からずじまいである。

検査が終わったころには2時間目が終わって休憩時間だった。

僕は山田先生に書いてもらったIS学園の地図を見ながら歩いていく。

途中廊下で女子たちが、

「あれって織斑君と一緒にのクラスに転校してきた男の子だよね」

「いいよね1-1は3人も男の転校生が来て」

「いいなあ！」

「ていうか1-1って転校生多くない？」

「1-1は生徒を少なめにしてたから、クラスの人数はほかのクラスと変わらないらしいよ」

「私も1-1に入りたかった！」

と女子の視線と話し声を気にしながら僕はようやくIS学園1-1に辿りついた。

僕は深呼吸し、そしてドアを開け、

「おはようございまーす！」

「うっさい黙れ、静かにしろ」

そこには僕の友達？の杉崎晃星がいた。

「杉もこのクラスだったの。なんか不安になってくるよ……」

「お前にだけは言われたくないな」

僕たちはお互いを罵り合っていると、

「あー、和ピーおはよう」

僕は振り返るとそこには昨日あったのほほんさんがいた。

「おはようのほほんさん」

「それにしてもあの模擬戦すごかったねえ。ラウラちゃんのISをボカーンって」

「それにはいろいろと事情があつてね。それよりこのクラスって専用機持ちがいっぱいいるね」

「そうだよー、和ピーを含めて7人はいるよー」

「へえー」

僕がのほほんさんと話していると、

「全員席につけ、3時間目を始める。それと弓弦は前に出てこい。自己紹介をしていないからな」

織斑先生が僕を呼んだ。

僕は教卓の前に立った……のはいいが女子の視線が痛い。

ていつかなにを言えばいいんだ？

「それでは弓弦、自己紹介をしる」

くそ、この沈黙なんかやだ……っていつかあいつ笑ってやがる。

くそー、なんか無性に腹がたつ。

よーし！

「弓弦和矢です」

しーん……

だから何？この空気……

「弓弦君、それで終わりですか？」

えっ？

他になにをしると、

くっ！

みんなは僕に何を期待してるんだ！

わかりました……僕の本気を見せてやる！

「みんなよろしくうー！ 僕、この学校で分からないことたくさんあるから教えてねー」

最後の締めめに片目をウィンクした。

声のトーンを上げ、ちょっと女の子らしくしてみただけでこれぞどうだ！

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

やっぱり沈黙。

一夏やセシリア、シャルロット、篝、ラウラはちょっとひいている。

やめて！そんな顔しないで

こっちが恥ずかしくなってくるじゃないか！

「山田先生、こいつ無視して早く授業進めてください」

「杉、貴様！僕の必死のアピールを」

「山田先生、授業を進めてくれ」

「わ、わかりました」

「山田先生、織斑先生僕の話は無視ですか！？」

「弓弦、早く席につけ」

「おい、無視か！」

というとパーンッ！という音がして、

「先生には敬語を使い、それと……………」

織斑先生を出席簿叩きと何かの書類を渡された。

「この前の脱走の反省文だ明日までに20枚書いてこい」

「この鬼教師！」

パンツ！

また叩かれ、

「敬語を使い、反省文の枚数を増やして欲しいか」

「すみませんでした！」

僕は杉の隣りの席に座った。

「よかったな、みんなに印象がついて」

「(#。°。(ダマレ!!」

そう言うと、周りから……………

「凄い、織斑先生に2度も逆らうなんて……………」

「弓弦君って前の学校では不良だったのかな？」

「でもさっきの自己紹介可愛かったね！」

「お前ら静かにしろ。これから授業を始める」

そして授業が始まった………が！

山田先生がちゃくちゃくと授業を進める中、教科書を見るが……
全然わからない。

どうしよう………

「ではこの問題を………弓弦君にやってもらいましょう」

山田先生がそう言うが僕は全くわからない。

「先生………」

「なに弓弦君、なにか分からないことがあるの？」

「なに一つ分かりません」

「えっ！」

「僕は前の学校でISのことなんてなに一つ教わってないですから
僕がそう言つと、

「そ、それでは杉崎君にこれを解いてもらいましょう」

「わかりました」

そう言っと

「この場合ペラペラ……」

こいつ！簡単に問題をときやがった。

みんなは驚きを浮かべる。

「正解です、杉崎君」

山田先生がOKをだす。

「杉、なんでわかるの？」

「俺はもともとISには興味があったからな。それに俺らは博士にISについて

けっこう教えてもらってるだろ」

「杉、あれ真面目に聞いていたんだ」

「当たり前だ。

お前がもらった紙を紙飛行機にして遊んでいるときにすっかりとメモっていたからな。

馬鹿なお前と違うからな」

「くっ、言われるとなんか腹が立つな。とりあえず杉教えてよ」

「断る。お前に教えると馬鹿がつつる」

「貴様！それじゃあ僕はバカの塊みたいじゃないか」

「そうじゃないのか？」

「このやるう！表に出やがれ」

「いいぜ、やってやるうじゃねえか！」

お互いに胸ぐらをつかみ、にらみ合っていると……

スパンツ！！

頭に強烈な痛みが走る。

この痛み前にも食らったような……

「貴様ら、前の学校では問題見だったことではあるな。

だが、今は授業だ問題は休憩時間にやってもらおうか」

「はい」

なんかかんやで織斑先生に締められ、授業が終わる。

「授業はこれで終わる、なお弓弦と杉崎は放課後反省文をとりにい。

10枚だ」

「先生、待ってください！どう見てもさっきのは杉が悪いでしょう！」

「20枚だ」

「鬼！この鬼畜やろう！ぐえっ！先生、首が締まります！！」

「返事はどうした？」

「わ、わかりました、わかりましたから首が締まってい、息ができません！！」

やっと開放されて教室を出ていく。

「し、死ぬかと思った！」

僕が首を抑えてると……

「馬鹿だな、お前は」

杉が近づいてくる。

「だって僕が書かないといけない反省文の枚数40枚だよ。反論ぐらいするでしょ」

「あれが担任だからな、そうもいかないだろう。」

「まったくだよ……」

そう話していると、

「お前たちの行動は呆れたものだ」

今度はラウラが来た。

「あっ、ラウラ。もう大丈夫？」

「あ、ああ、おかげさまでな」

「それでどうしたの？」

「和矢は馬鹿だからな。わ、私が勉強を教えてあげてやらんこともないぞ」

「本当！？ありがとうラウラ」

「ふーん、和矢ねえ」

杉がにやけた顔でラウラを見る。

「な、なんだその顔は・・・」

私はこのバカに勉強を教えてやろうとしているだけだ！」

「まあ、そういうことにしといてやる。

さて、邪魔者は退散するとしますか」

俺はあの2人から離れ、一夏たちのもとに行く。

「意外と優しいんだね」

シャルロットが話かけてくる。

「そうでもないさ。ただ面白そうなおことになりそうだからそういっ

ふつに
しただけだ」

「ふーん」

「後お前にも期待してるぞ。頑張ってくれよ、一夏は鈍感だからな」

「べ、別に僕は！」

「面白いやつだな」

そうやってシャルロットをからかっていると……

「ドゴンッ！！！！」

アリーナの方から爆音がした。

「な、なんだ！」

僕は驚いていた。

そのときだった！

（奴らが来た）

！？

頭の中から声が聞こえる。この声……

「奇跡加津佐！君眠るんじゃないの！？」

（・・・その話はあとだ。それより奴らが来た）

「奴らって？」

（お前たちが最初に戦ったあの2人組だ。お前たちを探している）

「でもどうして!？」

（急げ！関係のない人も巻き込ませるぞ）

「くっ！」

来い、月光！

僕はISを装着した。

「和矢、何を！」

ラウラが言う。

「僕がいかなきゃ行けないんだ！僕が」

「ま、まで!！」

ラウラの言葉を無視して僕は窓を突き破り、アリーナの方へとびたつ。

「いま行くぞ！」

僕はアリーナに到着した。

どこだ！

「待っていたぞ少年！（グラハム風）」

！？

振り向くとそこには例の2人組がいた。

「この機会待っていた。お前を倒す機会を」

「どうして!?!」

「私たちに言葉は必要ない、1対1の勝負だ。邪魔するなよ」

「わかったわ」

「それではいくぞ!」

そう言うといきなり襲ってきた。

「くっ!」

僕は閃刃で受け止める。

「どうしてこんなことを！（キラ・ヤマト風）」

「わかってしまった、私は君のISに身も心も奪われた……………」

それはまさしく……………愛だ!!!! (グラハム風)」

彼女は閃刃を切り払い、1?入れてきた。

「ぐっ!」

僕は衝撃を受け、後退する。

そのスキも逃さず、接近してくる。

「そっいえば名前を名乗ってなかったな。

ここであえて名乗らしてもらおう!!!!……………」

ルージユ・アステリカとな!!! (グラハム風)」

アステリカは僕の閃刃とまた切り結び、

「その命、私が貰おうける!」

「命はなんにだって1つだ! (キラ・ヤマト風)」

僕は力の限りをだし、跳ね返す。

しかし、アステリカは右手を出し、停止結界を発動した。

僕は硬直状態になった。

「私の愛、受けつとてくれ！」

僕に向かって剣を切りつけた。

「くっ！」

（僕はまた負けるのか……）

そのとき視界が真っ白になった。

（僕はまたここに）

（……またあつたな）

（加津佐……僕を笑いにきたの？）

（……そうじゃないお前が死ねば俺も死ぬからな）

（僕は疲れたよ、前のようにかわりに戦ってよ）

（……それはだめだ）

（どうして？）

（……お前はまだ生きている、立て。行くんだ、俺たちが生きるために）

（僕たちが生きるために……）

僕は加津佐の手を握った。

「デイメンションシステム発動！」

「これで終わりだ少年！」

アステリカが剣を切りつけようとした時、

その剣をつかんだ。

「なに！？」

「俺は、俺たちはまだ生きている！」

生きているんだ！！（刹那・F・セイエイ風）

右目は紅色、そして僕たちは……………1つになった。

「ここで終わりにしよう、アステリカ」

「同感だ」

お互い距離をおき、構える。

（和矢、これが最後の閃刃だ）

そう加津佐がいうと、

「閃刃第4形態：閃刃・真月」

閃刃が銀色に覆われ、背中に銀色の翼が現れた。

「いくぞ！！」

僕たちは力の限り接近し、

「うおおおお！！！！」

「はああああ！！！！」

互いに己の胸に剣が突き刺さり、

2人は銀色の光に包まれた。

「ここはどこだろう？」

真っ暗だ。

何も見えない。

歩いていると、奥に人がいる。

そのまま進む。

「君は進まなければならない」

その人に言われた。

「それってどういうこと？」

「大丈夫すぐにまた会える」

「あ、まって！」

そのとき光が襲う。

「ぐっ！」

どうなるんだろ、僕

気がつくところにはIS学園の門の前だった。

「ここってIS学園？てか僕ってアステリカと戦っていたんじゃない？」

(・・・俺にもよくわからない)

「加津佐、大丈夫？」

(・・・大丈夫だ。それよりなんだこれは)

「わからないよ、それよりIS学園について見よう」

僕たちはIS学園に向かうのであった。

なんなんだこいつ！（後書き）

すみません。そろそろめんどくさいんで速く終わらせようと思います。

内容グダグダでごめんなさい

書いた本人がバカバカしいと思う内容です。

それでは早くも

最終回！

乙！

次回 進むべき道

進むべき道（前書き）

速いこれがもう最終回だんて

進むべき道

僕たちはIS学園に訪れた。

僕たちが知るIS学園とまったく一緒だ……

とりあえず中を搜索してみるか。

僕のクラスの1-1へと足を動かす、そして……

「失礼しまーす」

と僕が言うと教室がしーんとなった。

なにこれ……

なんか前にもこんなあつたようかと考えていると、

「誰だ、IS学園の生徒じゃない奴をいれたのは」

えっ！

どういふこと？

「待つてください織斑先生！僕ですよ！わからないんですか!？」

「悪いが私はお前との面識が全くない。
それに先生と呼ばれたこともない。」

どういふことなんだいったい？

(・・・この世界は俺たちの知っている世界と違うのかもかもしれない)

(じゃああの戦闘の光で)

(・・・そういふことになるな)

頭がこんがりそうだ・・・

「とりあえず話は職員室で聞こう」

「あっ！ちょっと！」

どうすればいいのかな？

(・・・和矢、俺を出せ)

(わ、わかった)

((来い、月光！))

そうすると僕の体にISが装着された。

「」「！？」」「

教室が騒然する。

「お前そのISは！？」

「これが僕の専用機です」

「専用機？そんなIS見たこともないぞ」

「えーとですね……」

（……和矢、俺に変われ）

（う、うん、よろしく頼むよ）

「……もし俺が別の世界から来た人間だとしたらどうする？」

「別の世界？」

「……そうだ。俺はこことは違うIS学園にいて、それを確認するために俺は

このIS学園に入った。納得はできないだろうがな」

そう言つと、

「しかし、お前が他の世界から来たという証拠がない」

「証拠になるかはわからないが、ここには俺が知っている人間が少なくとも

5人はいる。

まず、織斑一夏、めんどくさいから名前で呼ぶ。篝、シャルロット、セシリア、鈴
そしてラウラ。

・・・なんならこの人たちの性格と好きな人の名前をいっても構わんぞ。

・・・俺の世界とこの世界が一緒だったらな

そう言つと、

「な、貴様!」

「な、なにを言っているのかしらこの人は!」

「べ、別に僕は!」

「ふざけるな!」

女性陣が一齐に言った。

「分かった、お前の言葉を信じよう。それでお前の名前は?」

(後は任したぞ)

(了解!)

「弓弦和矢です、それとこのISが月光です」

「そうかわかった、詳しい話は職員室で聞こう」

「それなんです、アリーナに行ってもいいですか?」

「どうしてだ?」

織斑先生が質問する。

「なぜだかわからないけど、呼ばれているような気がするから」

「誰が？」

「分かりませんがお願いします」

「分かった、今はアリーナが使っていないから別に構わん、しかし道案内として加津佐を同行させる」

「!？」

「どうした」

「い、いえ、なんでもありません」

(どういうこと、加津佐!？)

(……わからない、でも気になる。)

(わかった、聞いてみるよ)

僕はもう1人の男の子に話をかけた。

「よろしく、加津佐君」

「ああ、よろしく」

僕たちはアリーナに向かう。

「ねえ、加津佐君、君のフルネームって」

「ああ、奇跡加津佐だ」

（これって偶然かな？）

（・・・わからない）

そしてアリーナに着いた。

見渡す限り、僕たちのアリーナと同じだ。

「もういいか、そろそろもどるぞ」

「あつ、まって。ねえ、ちょっと遊んでいかない？」

「遊ぶとは？」

「バトルするってこと。」

「少しぐらいならバレないさ」

「しかし・・・」

「お願い！」

「仕方がない、少しだけだぞ」

そして僕たちの思い出の戦いが始まった。

僕たちはISを装着し、

「バトル！！（遊戯VS十代風）」

僕たちはお互いに武装を出した。

僕は閃刃・第1形態、加津佐さんは極光を

閃刃と極光がぶつかり合う。

なんども、なんども火花を散らす。

「強いですね、加津佐さん！」

「お前のなかなかだ」

「なら次は！」

「閃刃・第2形態、朧月夜」

僕の閃刃が伸び、加津佐さんに襲いかかる。（トランザムライザー
みたいな感じかな？）

加津佐さんはそれを余裕でよけて、ビットを出してきた。

僕はビットの攻撃をよけるがよけきれず、2発当たった。

「くっ！すごいです！凄いですよ加津佐さん！じゃあ今度は」

「第3形態、閃刃・双月」

閃刃が2つに分れる。

「うおおあああ！！！！」

ガキンッ！

「くっ、やるな和矢君」

「いえいえ」

「なら！」

加津佐さんの極光が変わり、

「閃光、行くぞ！」

加津佐さんは僕の双月を振り払い、懐へ素早く切りつける。

「クソっ！」

僕は距離をとる。

「やっぱり凄い、凄いよ加津佐さん！」

「君だって俺が突き離してもなんともおいかけてくる。面白い」

「ワクワクしてきた！」

そう僕がいうと、

(・・・和矢、俺も手伝うぞ)

(えっ? いいの?)

(・・・2人で勝つんだ、俺たちで)

(分かったよ、いくよ! 加津佐!)

「デイメンションシステム発動!」

「!?!? これは」

「待たせたな、これが俺の切り札だ」

僕たちの切り札を見せる。

「第4形態、閃刃・真月」

紅色の瞳、銀色の翼、銀色の閃刃

僕たちはまた加津佐さんに向かって閃刃を振るう。

加津佐さんは距離をとり、ビットを出す。

僕たちはビットの攻撃をよけながら、1つずつビットを壊していき、きりはらう。

お互い残りのシールドエネルギーが少なくなっていく。

「そちらも切り札を切ったか。なら」

加津佐さんがそう言うと、

「トリアルシステム発動」

加津佐さんの銀色のISがさらに銀色が増し、

「こちらもジョーカーを切らせてもらった」

凄い輝きだ！

「加津佐さん、僕こんなに楽しいバトル初めてだ！」

「俺もだよ、和矢君」

「じゃあ、最後のフィナーレと行きますか！」

「はい！」

「うおおおおおー！！！」

僕は渾身の力を込めて、加津佐さんのオメガに突っ込んでいった。

今僕はある草原にいる。

眩しい太陽に手」手を当てて、

「いい天気だなあ、絶好のお散歩びよりだ」

(・・・加津佐さんと戦ってあの後どうなったのか、元の世界に帰れたのか、アステリカはどうなったのか、それはまたの機会に話そう)

「加津佐、誰と話してるの？」

(・・・なんでもない、独り言だ。気にするな、それより・・・)

「分かってるって・・・その前に・・・」

加津佐さん！ガツチャ、楽しいバトルだったぜ！！(十代風)「

僕たちは先の見えない草原を走って行くのであった。

「IS学園生徒、弓弦和矢発見！確保します」

「えっ、まって！いい感じに終わりだったのになんて」としてくれたの！って

わあー！、離せえええええ！！！！」

そうして弓弦和矢は確保されたのであった。

END・・・

「こんな終わり方認めないぞー!!」

(・・・先が思いやられるな)

進むべき道（後書き）

ご愛読ありがとうございます。

でも最後はグダグダで終わりました。

どうか勘弁してください。

もう書くのがめんどくさかったんで

とりあえず自分乙！

皆さん大丈夫俺がなんとしても書かせます。

次回に期待をお願いします

OVA

あれから12年の月日が流れた。

俺弓弦和矢は、現在結婚しました。その相手が今でも驚きます。だって

「和矢、速く起きろ」

「……………後少しだけ頼むよラウラ」

そう俺が結婚した相手はラウラ・ボーデヴィツヒだ。まさか草原を歩いていたら確保されるわ

ラウラから説教はくるわで色々と合った。でも、告白してきたのは……………ラウラでした。

僕も驚きましたが今では幸せです。

「ダメだ。早く起きないと遅刻するぞ？」

「……………!?!?」

俺は肝心な約束を忘れていた。今日は久しぶりにみんなが集まる事になっている。

俺たちが初めて会った場所アリーナで

「それよりラウラ」

「ん？ なんだ？」

「月光は？」

ちなみに月光というのは俺とラウラの子供の名前だ。
なぜか知らないがISの名前になってしまった。現在10歳だ。
俺の息子はラウラに似てしまった。でも優しい。

「和矢、朝の……」

「……え？ やるの？」

「昨日もテレビではしてたぞ」

ラウラは何かとテレビの影響がおきい。

俺はそつとホッペにキスをした。これが毎朝の行事になっている。

「準備は？」

「OKです。父さん」

「私もいいです」

ラウラの口調も大分変わって来た。よかった。

それから俺たちは車で元高校IS学園に向かった。無論俺の車。

ISを使えば早いが……使えるのは俺一人だからな。家では

「久しぶりだな和」

アリーナに入るそうそう杉に出会った。だけど俺は

「……………どちら様ですが？」

「貴様またフライングドロップ食らわされたいか？」

「ダメだろそれは。ともかく、久しぶり杉。セシリアは？」

「ん？ 今買い物に行ってる」

杉が結婚した相手はセシリアオルコット。

マジでビビッたぜ本当に、それでセシリアと杉の子供の名前だけど……女の子で名前はマドカ・オルコット

「久しぶり和矢ー！！」

「久しぶりね和矢」

鈴とシャルロットだ。もしかして俺たちが最後なのか？

辺りを見渡したが二名の姿が見えない。ということ俺たちは最後ではない。

「すまない遅れた。一夏が寝坊するから」

「違う！ 篝だっで一緒に寝てたじゃないか！？」

「それは……………暁が一夏の隣で寝ているから……………その……………見てたら私もつい」

「結局篝じゃん」

と和矢止めを入れてきた。

それに筭は

「……………すまない」

「謝れば許そう」

何言っただ和矢

「ま、いいから座れよ」

「「あ、ああ」

何かぶってんだ？ お前ら今でもラブラブか？

俺たちはラブラブではない。朝起きなかったら時々ラウラはナイフを出してくる。

本当に怖い。でも、そんなところも含めて好きになったけど

「本当色々な事あったよな」

「ああ」

「確かに」

「そうだな」

「そうだね」

「ええ」

「そうですわね」

「そうだな」

ここで俺たちの物語が始まったんだ。

加津佐さん、元気にしてるかな。俺の中にいた加津佐は今もういない。

どうして、いないのかは今言えない。

だけど話そうかその時の話を……。でも今はみんなでの再開を楽しみたいから

OVA（後書き）

次回 どうしてこうなるの？

久々に僕が書いてしまいました。

すいません。元作者は現在俺と小説を書くための話作りで勉強中です。

しかも作者が依頼してきたのは、12年後の物語です。

だから過去の物語をいれるには、こうするしかなかったんです。

許してください。次回の更新はできるだけ早く更新したいとおもいます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1840r/>

IS <インフィニット・ストラトス> 月の剣士

2011年10月12日08時55分発行